

わしたものである、と同時に、聖光独自の見解と主張を持つものである。

来迎と臨終正念

立川道之輔

法然上人の阿弥陀経観、特にその来迎と臨終正念について述べてみようと思う。先ずその資料として『小経釈』及び『逆修説法』とを用いたことをあげておこう。

『逆修説法』にあつては、『小経』の「阿弥陀仏与諸聖衆現在其前是人終時心不顛倒即得往生阿弥陀仏極楽国土」と云う経文を引用しているのに対し、『小経釈』では「其人臨命終時阿弥陀仏与諸聖衆現在其前」までを引用している。この点両者はその経文の取上げ方に相違を示している。

『逆修説法』に於ける解釈には『称讃浄土経』の文を参照して、『小経』のキーポイントをおさえている。即

ち『逆修説法』の初七日の中に、『称讃浄土経』の「慈悲加祐^ソ令^ラ心不^ラ乱^ラ既捨^ヲ命已^ヲ得^テ往^ニ生^ニ住^ニ不退^ニ転^ニ」(浄全九、三八五上)という一文を引用しているのである。即ち、法然は『小経』と『称讃浄土経』との文を關係^ニとして、「令^ラ心不^ラ乱^ラ与^ト心不顛倒^ニ此即^ニ令^ニ往^ニ正念^ニ之義也。明知^ニ非^ニ臨終正念故有^ニ来迎^ニ。由^ニ来迎^ニ故臨終正念也。」(浄全九、三八五上)と述べられている。このように『逆修説法』は『小経』のポイントを心不顛倒と聖衆の来迎の二点に見出しながらも、後者を重視している。何故なら、法然は、臨終のその人が心不顛倒(正念)に住したが故に来迎があるのではなく、来迎にあづかつてこそ臨終に正念に住することが可能になるからであると説いているからである。この法然の説は、吾人が、来迎は衆生の称名念仏の功德の結果として、心不顛倒となることを得、その故に臨終の時に来迎があるものだと思ひこんでいる既成概念を打破してくれるのである。

『小経釈』にあつては引用した経文について二意あり

として、聖衆の来迎と行者の往生とに分つて解釈を施している。

先ず聖衆の来迎に就いて、法然は「念仏、行漸成就、往生期既至、時彌陀如来与諸聖衆俱来迎接、行者也（浄全九、三六二下）」と説いている。更に続けて

凡就来迎觀經乃説九品迎接之相。其文云上品上生者無數化仏与仏共来乃至下品下生但金蓮華来等。問此經来迎者九品生中是何来迎。答若依聖衆多少定其品位是似上品上生之相。所以者何此經曰其人臨命終時阿彌陀仏与諸聖衆云（浄全九、三六二下）」

と説いている。従つて『小経釈』に於ける来迎に関する法然の説示は、来迎の条件と来迎の品位とを問題として取扱つてゐるのである。来迎の条件とは、念仏の行よりやく成就した時、しかも往生の期、換言せば命終の時である。そこに始めて来迎のあることを説いている。来迎の品位については上品上生の来迎に類似すると説いている。この来迎の品位を定めるために『称讃浄土経』の

「臨命終時無量寿仏与其無量声聞弟子菩薩衆俱前後圍繞来住其前慈悲加祐令心不乱既捨命已随仏衆会生無量寿極樂世界」（浄全九、三六三上）」

としめくくつてゐる。ここでも『逆修説法』の場合と同じく、『称讃浄土経』の同箇所を少し前文から引用してゐるのであるが、そのおさえどころが『逆修説法』の場合と違つてゐることに注目しなければならない。今『小経釈』の場合は、『称讃浄土経』の引用文に續いて「此文已曰無量声聞等故知是上品上生也」（浄全九、三六三上）」と云つてゐるように、上品上生の来迎であることに間違いないという聖教量として『称讃浄土経』を引用してゐるのである。従つて来迎の品位を定めようとする『小経釈』の場合と、臨終における心不顛倒がいかんして実現するかを説くために『称讃浄土経』を引用した場合と、同じ經典の、しかも同様な箇所を引用しながらも、その目的によつて変つてゐることを見逃してはならない。このように『逆修説法』と『小経釈』とに見られる法

然の説相は、在家人と出家人と云う説法の聴き手によつて異つた説き方をなしていることを知つたのである。しかしそれらの相違はすべて『小経』の聖衆来迎を中心としてのことであつた。

この来迎の願について『逆修説法』には、「有往生極楽之志之輩。応予造来迎引接形像深仰来迎引接誓願。所謂来迎願者即四十八願中第十九願是也」（浄全九、三八四下）と説示している。

こゝに注目すべきことは来迎引接の形像を造ることである。少くとも往生を志すものは数ある仏像の造立の中講堂説法の相、池水沐浴の相、菩提樹下成等正覺の相、或いは光明遍照の相等、いずれの形像をもつてしても皆往生の業となるのであるが、しかし、来迎引接の相を造立することがもつとも往生の業を成就する上に適切であることを指摘し、その造立を勧めているのである。又同じく『逆修説法』に、

「此乃正為臨終正念有来迎也。謂行者命欲終時疾苦逼身必起境界・自体・当生三種愛

心爾時阿弥陀如来放大光明現行者前。行者既見未曾有事專心歸敬更無他念。又仏之慈念加祐行者。由之妄念忽止正念安靜」（浄全九、三八四下）

と述べているのは、臨終真近のものがあらゆる心身の苦痛苦悩にさいなまれ、せめられて、往生し難い精神状態即ち失念、錯乱の容態に陥ち入り、境界・自体・当生の三種の愛心を起すのである。このようであれば到底往生は望めないのである。しかるに阿弥陀如来は光明をもつて照らし、臨終の人の現前に来迎し給えば、その人はこの未曾有の出来事に心が集中し、外に思うことがなくなり、阿弥陀仏の慈悲のはたらきをうけて、ついに正念に住するに至るのである。

これを要するに『逆修説法』と『小経釈』とを比較対照してみると、聴き手の相異が説法の内容を規定していることに気づかされるのである。即ち前者は実践實際的であり、後者は教義学的である、と云う相違を見逃し得ないのである。